
ア・マ・ガ・ミ 橘純一列伝 生きた伝説と称えられ、キングオブキングと呼ばれた男

東雲 1号?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ア・マ・ガ・ミ 橘純一列伝 生きた伝説と称えられ、キングオ
ブキングと呼ばれた男

【Nコード】

N9186N

【作者名】

東雲1号？

【あらすじ】

橘純一は変態紳士である。普段は、エロで変態行動で、周りから白い目で見られる。だが、それは周りを欺く仮の姿。その実態は、ある意味で瞬時に女を撃墜できる天才的才能を持っていた。その才能とは、伝説的な指・・・その指さばきは、あの加藤・・・ゲフンゲフン・・・に匹敵する。そんな男が、高校に入学して時に馬鹿なことを、時にいや〜んなことをしながら、伝説？を作っていく話である。これは後に、生きた伝説と称えられ、王の中の王と呼ばれた、キングオブキング

物語である？

第1話 橘さん悪夢の中学生時代！！ それとこの俺をフツた上に小馬鹿にして

多分この小説での橘さんは、壊れています。

原作ファンの橘さん好みなら読まない方がいいです。

蒔原美佳ファンの方も読まない方がいいです。

それでも良い方は、どうぞどうぞ・・・ずいずいっと・・・

第1話 橘さん悪夢の中学生時代！！ それとこの俺をフツた上に小馬鹿にして

俺の名は橘純一。

気ままな高校生だ。

現在高校2年生。

容姿は中の上。

身長は、170センチ半ば。

まあそこら辺に居るような学生だ。

だが、そんな俺にも汚点が存在する。

それは中3の冬だった……

「おかしいな……まだこないのか？」

この街の有名なデートスポット兼アベック同士の待ち合わせる有名な場所、人を待っていた。

断つとくが男じゃないぜ。

女だ。

もう3時間以上待っている。

雪が降る夜。

周りの景色は白く染まり、両肩も少し積もっている。

「……おかしい……後30分待ってみるか」

自分好みの女だった。

小学校時代にも初恋の子はいたが、そいつは却下した。

順当にいけば、そいつを呼ぼうとしたが……

いかんせん残念な存在に変わり果ててしまった。

子供のころは可愛かったのにねえ……

彼女を知る存在は、そう言っただけで誤魔化す。

元々頭が残念なやつだったが、ああなつては救いようがない。
あれはあれで、嫌な経験だった。

おっと、こうしている内に30分経とうとしていた。

「こないな・・・仕方ないか。俺はそういう存在だったという
訳か・・・」

振られたな・・・

まあいい、しかし理由は知りたいな。

この俺を差し置く理由が他にあるのか？

冠婚葬祭なら話が別だが・・・

次の日・・・

この俺が直々に呼び出した女まはら時原美佳みかに尋ねてみた。

「ねえ、時原さん・・・何で昨日来なかったの？」

「えっ・・・ああっ・・・あの事ねえ」

「もっ・・・もしかして、忘れてたの？」

「忘れてたっていうか・・・ねえ橘くん、もしかして真に受けちゃ
ったわけ」

「えっ？」

「やっぱり、そう言う事か・・・とにかく最後まで聞いてみるか」

「あはは・・・やっぱり真に受けてたんだ。いやっねえあれは冗談
だったの、冗談」

「じよ・・・うだん・・・？」

「きのうさあ、私友達とちよつとしたゲームして負けちゃってさあ。
それで罰ゲームを受けることになって、そこに橘君あなたが来た訳
・・・」

「という事は・・・？」

「察しが悪いなア、要するにあなたは罰ゲームのダシに使われたの。あなたが私に気がある事を周りは知っていたから、からかってみたのよ……」

「……」
言葉が出ない。

というかあの時、誘ったら呆気なくOKしてくれた時点で、気付いてはいたが、ここでそう言う事だったという確信を得たな。

「ゴメン……そっちも冗談だと思っていたから、敢えて行かなかつたの。ホントにゴメン」

嘘だな。

お前の眼は嘘をついている。

一応社交辞令で誤魔化してはいるが、誘った時OKしてくれた時したあの目は忘れないぜ。

あれは、自分を小馬鹿にした眼だった。

俺という存在を舐めきっていた目だ。

本心では……

「はあ！馬鹿じゃないの。何であんたみたいになつまらない男と付き合い合わないといけないの。付き合っただったら、御木本様位じゃないと釣り合わないから。人を馬鹿にするのも大概にしてよね。」

それでも、俺は信じたかった。

因みに御木本様という奴は、フルネーム御木本^{みきもと} 久遠^{くおん}の事だ。

俺の先輩で、女に関しては撃墜王と呼ばれる、男の敵だ。

高身長でルックス良しモデル並みの体型の持ち主だ。

だが、俺には及ばん。

奴は、質より量をとる。

量より極上の質しかとらない俺とは違う。

そういう意味では、優れた資質を有効活用していない。

残念な奴だ。

それより話を戻そう……

信じたかった・・・
信じたかったぞ・・・

昨日の出来事だった。

オレの下僕と性欲対象外の二人は、どこからともなくそれを聞きつけて、いらぬ世話を焼いてきた。

断ろうとしたが、断ると、めんどくさくなるから知られなくなかったのだが・・・

特に性欲対象外・・・お前は特にめんどくさい。
泣くなんて卑怯だ。

それが女の特権だろうがな・・・チツ・・・

普段は頼りたくもない下僕 梅原 正吉つめほろ まさよしから参考に程度に手を借りて、デートプランを立てた。

そして、幼なじみの性欲対象外 桜井 梨穂子さくらい りほこと一緒に社交辞令的に、喜びそうなプレゼントを買ったのに・・・

「まあとにかくゴメン。橘君さあ・・・一つだけ言ってもいいかな？」

「何？・・・かな」

「あのお・・・こう言うのは失礼な言い方だけど、もう少し女の子に好かれる努力した方がいいよ・・・昨日もちよっと誘い方が怖かったし、とにかくそういう事だから」

言うだけあって、蒔原美佳は俺の前から失せた。

俺から、去る時一瞬馬鹿にする様に鼻で笑ったな。
気付かないとも思っただのか？

癪に障る。

俺は、彼女の教室から去ったその時、周りからの視線が「馬鹿だアイツ」「身の程知らずが」と言っていた。

全く、周り全員馬鹿にしゃがって……

ああ……そう言えば説明忘れていたな。

おかしいと思わなかったか？

心の声では、偉そうに喋っているに実際言葉では、「あの〜」だの「その〜」と情けない喋り方していたかという点だ。

そりゃ、あれだ。

学校では、大人しい自分を演じてるんだ。

それと多少脚色はしている。

工口でスケベで、時折意味のわからない行動する存在として……自称も実際は、俺だが学校では僕と言っている。

学校では、クラスからの連中からさえ舐められた目線で見られているが、実際は違う。

そう言う眼で見られていた方が、色々都合がいい。

実際の自分は、そんなんじゃない。

女がある意味で落とすことにかけては、右に出る者が居ない指技の使い手だからだ。

少なくとも、この中学ではそれに叶う存在が、ギリギリ彼女だけだった。

後は街に繰り出し、その技に磨きをかけていた。

さっきも言ったがな、俺は量よりも極上の質しかとらないタイプだ。もっと言えば、質よりも極上の質だ。

極上の質……例えれば、輝日東高校の森嶋はるかクラスかな……そして、俺が行こうとしている高校だ。

その前に、俺を馬鹿にしたあの身の程知らずに、協力にすら値しなかったが、暇な時間をわざわざ割いてくれた、あの下僕と性欲対象外の仇をとってやるう。

蒔原美佳は、馬鹿だった。

今彼女は、下校途中に仕方なく妥協点で付き合っている彼氏と待ち合わせしていた。

街の中心街の駅前で・・・

「おっそいなあ・・・あいつ・・・いつまで待たせるつもり」

人は人、自分は自分だ。

「全く女を待たせるってサイテーな奴。別れようかし・・・え!?!?」

その瞬間、彼女は見てしまった。

かっこいい男に。

自分が付き合いたい男ランキング現在超1位の御木本 久遠と同等、もしくはそれ以上の男を・・・

顔が赤くなる。

ヤバイ・・・カッコいい。

自分と釣り合わない位に・・・ヤバイヤバイヤバイ!!キヤッ!!
そう一人で、はしゃいでいると彼がこっちに来てくれる。

エッ!?!まさかこっち来る!!嘘ッ!!

「そこのお嬢さん・・・今暇かな?」

「えっ!?!?」

「どうしたんだい?・・・ごめん、今暇かなあと聴いているんだけど・・・邪魔をしたかな?」

「いつ・・・いえ・・・暇です。暇ですよ」

思わず猫かぶり声になる。

「そう・・・ならよかった。ねえ良ければ僕に少し付き合ってくれないかな?」

「ええ〜いいんですかあ・・・私と一緒にえ〜」

「ここに友達と買い物に来る予定だったんだけど・・・用事が出来たみたいでね、来られなくなっただ。ちよつと女の子にプレゼントを買いたいんだけど、僕って男だから、分らない所が多くてね。その時、たまたま目があった君にちよつと手伝ってもらいたかったんだ。本来は友達の役目だったんだけど、同じ女の子なら、どういうプレゼントがいいか、わかると思つたから・・・迷惑だった？」

「いえいえ・・・そんなわけじゃないですよ。私でよかつたらお手伝いしますよ」

「なら、行こうか」

そして、謎のイケメンとのデートが始まつた。

彼の名前は、氷室雄介と言つた。

彼は良い男だつた。

草食系男子で、紳士的でよく気がきいて、かつイケメン。

身長は、自分の基準より少し低いかなという感じだけど、イケメンだから別にいい。

年代は18歳だそうだ。

高校は、輝日東高校だそうだ。

「ねえねえ氷室さんって、あの森嶋はるかさんにアタックしないの？」

「あの森嶋はるかかい・・・アタックなんて恐れ多いよ。あの御木本 久遠がアタックしても、振られてしまったみたいだしね。僕では到底無理な話じゃないかな」

「そんなことないですよ。氷室さんって十分イケメンですし、釣り合いますよ」

「ありがとう時原さん。そう言ってもらえるだけでも十分だよ」

買い物している内に、どんどん良い雰囲気になっていく二人・・・

彼女の心は、既に彼の方に傾いていた。
こんなに優しく紳士的でイケメンの男はいないから、自分だけのものにしたいと言う気持ちが大きくなっていき・・・
そして、遂に・・・

「どうしたんだい蒔原さん？僕をこんな所に連れてきて・・・」
「うっ・・・」

「あの・・・聞いてもらいたい事があるんですけど・・・」
その瞬間氷室は、察した。

「氷室さん・・・私・・・私・・・」

その時氷室は、ギョツと軽く抱きしめて

「蒔原さん・・・訊いていいかな？」

「ハイ・・・」

「僕なんかでいいのかい？君は十分に可愛いし僕以上に釣り合う男はたくさんはずなのに・・・」

「そんなことないです。氷室さん・・・私と付き合ってくれませんか？私はあなたが好きです」

「もう一度聞くけど、ほんとにいいのかい？」

「ハイ・・・私氷室さんじゃなければ嫌です・・・」

「わかった・・・実は本音を言えばね、僕も一人の男として、出会ったときから君が好きだったんだ。でも、僕は最低だ。ホントは僕から言わなければいけないのに、勇気がないばかりに、君にそんな台詞を言わせてしまった。僕は男として失格だよ」

「そ・・・そんな・・・氷室さん。そんなことないです・・・私だつて・・・」

「蒔原さん・・・」

「美佳って呼んで下さい・・・」
「美佳・・・」

その後二人は、ラブホテルに入りベッドの上で、するべき事をした。彼は上手かった。

特に指の使い方が・・・うまくてえ・・・
何度も何度も・・・わたしはあ・・・あ〜れ〜ええええ・・・

事を済ませた後・・・氷室は蒔原に黙って先に出て行った。
もう読者は分かっていると思うが、氷室雄一の正体は、実際の橘純一である。

人目のつかない所で、変装を解いて学校側に連絡を入れる。
未成年の彼女が、ラブホテルでいやらしい事をしてますよって・・・
因みに彼氏は、駅の中の便所でお眠りしてもらっている。

もうそろそろ、目を覚ますかもしれないが・・・
明日が、どうなるか見ものだ・・・
少なくとも、ロクな目に逢いそうもないのは、分かるが・・・
悪いが、俺を舐めた事してくれた事と下僕・性欲対象外の分の怒りは、受けてもらうぜ。

と言っても下僕と性欲対象外の二人分の怒りは、実際関係ないけど
な・・・

第1話 橘さん悪夢の中学生時代！！ それとこの俺をフツた上に小馬鹿にして

初めまして、東雲1号？です。

まず断っておきたいです。

作者文章力はありません。

なので、普段こんなセリフ言わないよと思う方もいるかもしれませんが
ん。

うまく書けていないと思いますが、最後まで読んでくれてありがとう
うございます。

作者は、それだけでうれしいです。

もしこの作品に感想があれば、どうぞ。

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9186n/>

ア・マ・ガ・ミ 橘純一列伝 生きた伝説と称えられ、キングオブキングと呼

2010年10月21日16時52分発行